

精神分析とトラウマ

クライアントとともに生きる心理療法

平井正三，櫻井 鼓編著

金剛出版，A5判230頁，4,180円，2025年3月刊

(兵庫県こころのケアセンター) 亀岡智美

19世紀に誕生したトラウマの概念は、その後社会の注目と無関心の荒波にさらされてきた。本書は、トラウマ概念の誕生とその変遷、さらには、PTSDを中心とする新しいトラウマ概念が社会に認知され普及した20世紀以降のトラウマケアや治療について、精神分析の立場からバランスよく詳述した良書である。

本書は、第Ⅰ部：精神分析とトラウマ、第Ⅱ部：発達とトラウマ、第Ⅲ部：コミュニティとトラウマ、から構成されている。第Ⅰ部では、精神分析における多様なトラウマ論が紹介され、近代のトラウマ概念が生まれる前後の時期に至るまでのさまざまな知見が示されている。ここでは、有名な症例を引きながらフロイトの外傷論を解説し、その理論が壁に突き当たるたびに、撤回されたり変更されたりするさまが述べられている。社会がトラウマを受け入れなかった時代の苦闘が伝わってくるようで、トラウマの貴重な源流を目の当たりにする思いがした。タビストックが、被虐待児の精神分析的な心理療法で多職種協働を重要視したことも、現在の子どもの精神療法の基本につながると思われた。

続く第Ⅱ部では、発達の観点からトラウマが捉え

られ、トラウマを抱えた子どもの精神分析臨床の在り方が紹介されている。主体性の破綻としてトラウマを理解する視点、自我と対象関係の脆弱さを有するASD者がトラウマを経験することの意味、言語でのコミュニケーションが困難な子どもとの濃密な治療経過を示した事例などを読み進めるうちに、読者はどつぷりと精神分析の世界に浸りこむだろう。

最後の第Ⅲ部では、いじめ・犯罪・自然災害とトラウマの問題が取りあげられ、それぞれ事例を挙げながら、精神分析的解釈や支援の在り方が提案されている。いじめによる子どもの傷つきを理解するために、乳幼児観察における観察者の態度が有用であるということ、犯罪被害者が壮絶な苦痛に向き合うためには、それをわかちあう存在が必要であること、大災害後の被災地に身を置いた臨床家がみた「日本的ナルシズム」などの視点は興味深かった。

本書では、いくつかの章で挙げられているトラウマ症例への精神分析臨床と、自らが携わっているPTSDへのトラウマ焦点化治療との相違を改めて実感した。しかし、本書から最も学んだことは、治療における関係性において、各臨床家が、自らの反応（逆転移）を冷徹に正直に観察し、自らがクライアントに与える影響を厳しく見つめる姿勢である。これは昨今普及してきたトラウマインフォームドケアで、支援者のトラウマ反応として理解されることと共通している。しかし、表層のトラウマ反応の奥底にさまざまな感情が渦巻いていることを、臨床家として忘れてはならないだろう。「クライアントとともに生きる心理療法」という副題が示すように、本書は、すべての臨床家が傍らに置いておきたい本である。